寺子屋の保健室

安田夏菜
え・たむらかずみ

ここは、むかしむかしの大阪です。
町のはずれに、寺子屋がありました。
古い家を改造した建物は、広いけれどボロボロ。やぶれた障子もそのままです。
「ああ、あんたが転校生かいな。さあ、こっち入りなはれ」
「はい！　失礼します！」
「えーと、ようかん屋のお松ちゃん。十才と聞いておるが」
「はい！　父がこのたび、このなにわの町でお店を開くことになりまして、東の方からひっこしてきました。あのう、あなたがこの寺子屋の、お師匠さまですか？」
「さようさよう。まあ、見てのとおりのたよりなーい、きたないジジイじゃがな。あんた今、心の中で『ほんまやな』とつぶやいたね」
「いえっ。そんなこと、ぜんっぜん思ってません！」
「ええんじゃええんじゃ。師匠も建物も、このとおりきたない寺子屋じゃが、なかなか居心地はええはずじゃぞー。さあ、案内するから、わしについてきなはれ」
「うわっ、歩くたんびに、ろうかがギシギシいいますね。足もとも、ザラザラしたりネトネトしたり、ふしぎな感触……。きゃっ、あっというまに、タビの裏が真っ黒に！」
「白タビが、黒タビに早変わりという、ちょっとお茶目なおもてなしじゃ。ふぉっふぉっふぉっ」
「そうじしてないだけじゃないですか」
「さあ、ここが教室じゃ。みな、精出して学問にはげんでおるぞー」
「これがですか？」